

言葉との邂逅

『心理療法序説』 河合隼雄 ○岩波書店

万物と自己とは、根源的には一つ

二一世紀のマネジメントは、どこに向かうのか。

永年、マネジメントの道を歩み、辿り着いた一つの答えがある。

「これからの時代のマネジメントは、カウンセリングの世界に近づいていく」。

多くの部下を預かり、現場の矛盾と格闘し続けた日々。そうした日々において、心の支えとなり、糧を得た書物は、実は、経営学者の本でもなければ、企業経営者の書でもなかった。

それは、臨床心理学の道を行く河合隼雄氏の著作であった。

数十年にわたり、一人のカウンセラーとして数多くのクライアントの悩みに耳を傾け、その心に正対し、病める心の治癒を支え続けてきた河合氏の著書は、いかなる書よりも、深く納得し、

共感できるものであった。

なぜなら、カウンセラーとマネジャーは、一つの行為において、共通の仕事に取り組み職業だからである。

「相手の心の成長を支える」。その相手が、クライアントと部下という違いはあれども、カウンセラーも、マネジャーも、「他者の心の成長を支える」という一点において、共通の世界を歩んでいる。

そして、河合氏の著作に最も深く共感するのは、氏がカウンセリングの逆説を語るときである。「カウンセラーは、クライアントを癒すわけではない。クライアントは、自らの力で自身を癒していく。我々は、その自己治癒のプロセスを、粘り強く支えるだけである」

然り。マネジメントも同じ。

マネジャーは、部下を「成長させる」ことはできない。部下は、自らの力で成長していく。我々が為すべきことは、ただ「成長を支える」ことだけである。

では、「成長を支える」ために、何が求められるのか。それは、言葉にすれば素朴なこと。だが、実行は極めて難しい。

「部下の心に正対すること。操作主義の心を持たず、

無言の声を聞き届けること」。

しかし、この困難な行に取り組むとき、マネジャーは、さらに深い世界に気がつく。そして、河合氏が語る「矛盾に満ちた言葉」に深く共感する自分を見出すだろう。

「何もしないことに、全力を注ぐ」



田坂広志
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

そして、河合氏は、その先にマネジャーが辿り着く、さらに深い世界をも示唆する。それが、この『心理療法序説』の中で紹介される「雨降らし男」の物語。万物・自己一体の寓話。「自分の心に秩序を得たとき、世界も秩序を回復する」。その不思議な寓話である。しかし、それは、実は、我々マネジャーが、日々の職場で、常に経験する真実に他ならない。ただ、我々は、その真実に気がつかない。

BOOK